

中国における「民族」概念：その理論と実践 —— 民族識別作業を中心として ——

余志清*

はじめに

中華人民共和国建国以来、民族の定義、民族の形成、「民族」という語彙の翻訳など民族論をめぐる論争は、社会科学における最も有名な論争として、民族学・人類学・言語学などの分野の学者によって、さまざまに論じられ、今日に至るまである。それは中国が「統一された多民族国家」で、「民族とは何か」についての論争は、理論的にはもとより、民族政策などにもただちに影響するためであるといえる。「民族」概念は中国でどう運用されてきたのかを、中国の民族識別という作業からみて行きたい。

1. 民族識別の背景とプロセス

1. 民族識別の背景

民族識別の背景について、民族識別作業の提唱者とリーダー、中国民族学の権威である費孝通は次のように述べている。「(新中国成立後) 民族の平等を実現するために、我々は新たな制度を作る必要があった。政治体制の上では、各民族の代表者が参加する最高権力機関、すなわち人民代表大会の創設が必要であった。しかし、新中国建国直後の時期には、中国に一体いくつかの民族がいるのか、それらはいかなる名称なのか、そして人口はどれぐらいなのかということさえわたしたちにははっきりわかっていなかった。」(費孝通, 2000) つまり、各レベルの人民代表大会においてどの民族が何人代表を選出すべきかを決めなければならない。また、民族政策の一つである民族区域自治を実行するために、各地方がどの民族の集居区であるかを明らかにさせておかなければならない。個人においても、新中国政府が戸籍制度を導入し、それを民族平等の政策とむすびつけるため、住民が一人一人に自分の「民族成分(民族出自)」を明確に申告しなければならない。書類に記入された民族成分も勝手に変えることが許されない。個人ごとの民族成分が確定されないと中国政府の民族政策が実行することができないわけである。

そのような状況を応じ、費孝通と林耀華両教授が1956年8月に「中国民族学当前的任務」のなかで、「少数民族の族別問題に関する研究」を当時民族学研究における四つの任務の第1位に置き、民族識別の重要性を強調している。(他の三つの任務とは少数民族の社会性質に関する研究、少数民族の文化と生活に関する研究、少数民族の宗教信仰に関する研究である) 1953年中央民族事務委員会が「畚民」を識別するための調査組を派遣したことを第一歩として、民族識別と呼ばれるある民族的な集団(エスニック・グループ)の民族出自(民族成分)と民族呼称を認知し、弁別

*筑波大学大学院歴史・人類学研究科

する大規模な作業が民族学研究的な重要な任務として行われていた。民族学者が他の学科の学者と協力し、1982年2月10日に国家民族事務委員会が「民族識別と民族成分の更改に関する作業は既に基本的に完成」を発表するまで、30年あまりにわたって、この作業の基本的段階を完成させた。

2. 民族識別のプロセス

民族識別以前、中国の民族状況は極めて複雑で、曖昧であった。中国の地域が広く、歴史が長いこと、民族の淵源がきわめて複雑であり、各民族はお互い接触し、交流しながら、興亡・分裂・融合・移動などのプロセスを経てきた。また各民族の社会経済発展のレベルは不均衡であり、分布上にも、「大分散、小集居」という特徴が現れている。建国以前、中国の民族状況とくに西南辺境の民族状況に対する調査と研究がほとんど行われてこなかった。1911年の辛亥革命前後、孫文が「五族共和」の政治綱領を提起したが、漢・モンゴル・満・回・チベットという「五族」は中国のすべての民族を総括することができなかった。1930年代に民族学者が西北・西南地方で調査を行っていたが、それもただ局部的にすぎなかった。

1953年の第一次人口センサスにおいて、民族称の自己申告をなされた。その数は400にも上った。個人が意識した共同体と実際の民族共同体は必ずしも一致しない、族称の申告だけでは民族識別の基準には不十分だとみなされた。その400あまりの族称は次のように分析された。(費孝通, 1980; 李紹明, 1998)

①汎称 古代中国では、中原周辺の各族が「東夷、西戎、南蛮、北狄」と呼ばれていた。この汎称は50年代まで使われていたが、これは族称ではなく、蔑称である。また、貴州省の少数民族はすべて「〇〇ミャオ」と呼ばれていた。

②同一民族のさまざまな支系による自称。イ族は32の自称と40以上の他称もあった。

③同一民族の地域差と方言差などによる自称

④生活習慣・服飾による他称。ミャオ族：青ミャオ、白ミャオ、花ミャオなど。

⑤同じ宗教からの他称。イスラム教を信仰している民族がすべて「〇〇回」と呼ばれていた。

⑥漢民集団の自称と他称。早くから少数民族地区に移って、漢族のアイデンティティを失った漢民集団は、漢族からも、少数民族からも差別され、自ら少数民族であると申告した。など。

民族識別から明らかにしようとする基本的な問題とエスニック・グループが漢民族であるのか、それとも少数民族であるのかと、もし少数民族であれば、単一民族であるのか、それとも他の民族の支系であるのかという2つであった。(費孝通, 1980) 民族学者が実際に民族地域で総合調査をし、少数民族の社会歴史・言語・文化などを研究し、1953年から1990年にかけて、次のような四つの段階を経て、大規模な民族識別作業を行っていた。(黄光學他, 1995)

①建国-1954年(発端の段階)。400の申告のうちから、弁別と合併を通じ、39の民族が認定された。

②1954年-1964年(高揚の段階) 雲南、貴州、湖南、広東などの異なった族称を申告したエスニック・グループに対する調査が行われ、新たに15の民族が認定された。また、74の族称の異

なった少数民族が53の民族に合併された。

③1965年-1978年（停滞の段階）「文化大革命」のため、チベット地区のロツパ族しか認定されなかった。民族識別作業が中止となった。

④1978年-1992年（回復の段階）ジノー族が認定されたほか、50年代から残された問題の処理、民族籍の回復や更新が行われた。

人口の91.02%を占めている漢族のほか、55の少数民族がいるということで、中国政府が正式的に56の民族を認定した。

II. 民族識別の理論と実践

民族識別作業の基準として用いられたのは、スターリンによって定義された「民族」概念の四つの特徴であった。（費孝通，1980）1913年，スターリンは「マルクス主義と民族問題」という本の中で，民族を「言語，地域，経済生活，および文化の共通性の内に現れる心理状態の共通性を基礎として生じたところの，歴史的に構成された人々の堅固な共同体である」と定義した。1907年，バウアーは『民族問題と社会民主主義』のなかで，「民族は共通の運命によって結合され，したがって共通の民族性格を有するところの人々の総体であるし，運命共同体を通じて一つの性格共同体に結合された人々の全体」[毛里訳・1998]と考えたが，スターリンはその理論を唯心主義として批判し，「民族が偶然なものではない，歴史的な範疇である」と強調した。スターリンによれば，四つの特徴（共通の言語，共通の地域，共通の経済生活，共通の心理要素）がいずれも不可欠であり，そのため，ユダヤ人と中国の回族は民族ではないと考えた。この定義はヨーロッパの資本主義が発展してきた時期に形成された民族を基準にしてなされたものであり，「近代ヨーロッパを対象とする時には科学的であるが，中国の場合はそれをそのまま当てはめるわけにはいかない。」[費孝通・1980]中国の民族識別の結果からみれば，四つの特徴を満たした民族はほとんどおらず，また，回族も単一民族として認定された。実際に民族識別の場合，中国の学者たちはスターリンの民族概念を参照しながら，この四つの特徴を柔軟に理解している。（費孝通，1980，2000，李紹明，1998）

まず「共通の地域」が「民族形成と発展の物質的な基礎」と理解されているが，中国の諸民族の居住形態は，「大雑居，小集居」という特徴がある。各民族が大小を問わずそれぞれの地域に集居している同時に，他の民族とも雑居している。したがって，この特徴について，民族識別の実践には，民族が「共通の地域」を持たなければならないが，同一民族が必ずしも整然として連なる区域を持つことには限らないというふうに考えられていた。例えば，回族の人口の860万（1990）のうち，700万が全国各地に分散している。

「共通の言語」が民族の重要な特徴であり，民族識別の重要な根拠とみなされているが，各民族の言語状況を具体的に分析してみたら，異なる民族が共通の言語をもつこともあれば，同一民族が異なる言語をもつこともある。この原則は実際に「共通の言語がなければ，民族共同体でないとはいえない」というふうに理解され，運用されていた。例えば，現在，満族や回族などが漢語

を日常語としている。

次に、「共通の経済生活」について、それは民族形成の基礎的な要素と理解されている。しかし、分散している同一民族の経済発展が一致することが困難であり、かれらは共通の経済生活を営んでいるとはいえない。民族識別において、「共通の経済生活」が「そのまま運用して中国少数民族の特徴とすることができない」という結論に至った。

「共通の文化心理要素」が、共属意識、アイデンティティなどとも理解されている。そこに、その民族の社会、経済、歴史の特徴が反映されているといえるが、最も理解しにくい特徴である。民族識別の実践において、最も重要な標識として運用されていた。回族の例をみると、回族はすでに他の三つの特徴を失ったが、宗教を中心とする共同の文化と民族意識をもっているため、単一民族と認定された。

以上の分析のように、中国各民族において、四つの特徴が非常に不均衡である。したがって、民族学者は無理やりにそれらを当てはまるのではなく、中国の実情を考慮し、大規模なフィールドワークを行い、文献資料を参照し、民族識別作業を完成させた。そのなか、民族の族称と族源、民族自身の願望を重要指標として重視していた。その点については、「マルクス主義と中国の実際をあわせて考慮し、運用し、成功した一つの例」と評価された。(李紹明, 1998)

Ⅲ. 民族識別と民族認定：科学研究と政府行為の差異

中国政府は民族識別の研究成果を根拠として民族の認定を行った。実際に民族成分を決定する時、「名従其主」という原則が提出された。つまり、族別問題の解決を他人が請け負うことはできないし、脅迫し、強制してはいけない。最終的にはその民族自身の希望を尊重しなければならない。具体的族称を決める場合は、その民族の人々、特に代表的な人物との協議を通して、多くの自称あるいは他称の中から、一つの名称を採用したわけである。個人の意識する族別と識別後の族別が一致しない場合、政府が説明や協調を行った。それでも納得できない場合は、そのまま問題として残した。

民族認定は一つの複雑な「行政」行為といえる。その場合、科学的な定義以外の要因（経済的利益・政治的利益）も実際に考慮されていた。民族識別作業における偶然性について、馬戎は広西チワン族自治区楽堯山隴人を例として、論じていた。(馬戎, 2000) ここでも、楽堯山隴人の民族成分の認定過程を見てみよう。

民族認定以前、楽堯山の隴人が自己の民族成分をしらず、漢族またヤオ族であるという意見を持つ人がいたが、一般的に隴人を自称していた。1952年に政府の役員が隴人の生活苦と山地に居住しているという二つの理由で、ヤオ族ではなからかと判断し、ヤオ族の名で彼らの代表を地方の代表大会に参加させた。当時の代表の話によると、ヤオ族である根拠が知らないが、代表としてヤオ族であることを宣伝していたという。1953年になって、現地で調査が行われるとき、普通の群衆はどちらでもかまわない態度をとったが、幹部と積極分子は政府の政策上の優遇と民族区域自治権をえるため、ヤオ族として認定される願望が強くなってきた。(広西自治区編輯組, 1987)

ここで、経済的利益と政治的利益などの現実的要素が民族認定を大きく左右していた。政府行為としての民族認定と民族学研究としての民族識別との矛盾が生まれたといえる。

その他の問題も遺留されている。例えば、いまだに民族として認定されていない人口は75万いる。1982年以来民族籍の回復と改変を申請した500万人のうち、200万人の問題が残っている。また、時期、地区による民族認定の不一致性もある。例えば、雲南省のブミ族は民族として認定されたが、四川省のブミ族はチベット族に合併された。雲南と四川省の省界周辺に住んでいるモソ人は雲南省でナシ族と認定され、四川省でモンゴル族と認定された。すぐ隣に住んでいるが、二つの民族となってしまった。

IV. 民族識別に関する評価

中国において、民族識別に対して、主に次の二つの面から肯定的に評価されてきた。一つは政治的な役割からの評価である。民族識別の目的の一つは、民族区域自治などの民族政策の実施対象を認知するためであった。「各民族が一律に平等であり、団結互助すべき」を方針とする民族政策の実施に大きく貢献したと高く評価されている。

もう一つは学術価値からの評価である。民族識別は建国後、民族学の重要な課題であった。民族学者が大規模な総合調査を行い、文献資料、民族文化などを参照し、民俗学、人類学、地理学などの研究成果を利用し、民族の族体と族称を総合、全面的に研究、分析した。調査により大量の貴重な資料を獲得し、民族研究に大きく寄与している。

そのほか、民族識別を検討する意見もみられる。例えば、馬戎がこうして指摘している。「民族識別作業では、民族平等が強調され、人々の願望が十分重視されていた。ただそれで、分けるべきではないエスニック・グループがそれぞれ単一の民族になってしまったこともある。」「今日、いかに改めて50年代の民族識別を評価するのは容易ではないが、それがなぜ発生したかを再検討しなければならないし、遺留された問題も解決しなければならない。」(馬戎：2000)

結び

スターリンの民族理論がその誕生地ソ連で、50年代から、激しい批判を受け、次第に放棄されつつある。(熊坤新, 1998) 中国では、民族識別のため、この概念をめぐる、活発に論じられてきた。「今まで最も科学的な民族概念」という意見もあれば、否定的な意見も聞こえるが、修正してから使用し続けようという意見が主流である。実際、今日、中国の権威のあるテキストや辞書の中でも、この概念が依然として採用されている。

50年代、中国政府が民族識別や「少数民族社会歴史調査」などの大規模な作業を行い、1700人以上の参加者が動員された。参加者は当時「三同」(少数民族と一緒に食べる、住む、働くこと)という方法でフィールドワークを行った。調査により獲得した数多くの基礎資料は「民族研究の財宝」と呼ばれている。民族識別について言えば、中国の学者たちは中国の実際の状況から出発し、研究していた。スターリンの民族概念がただ参考にしていただけだったが、多くの議論はそ

の概念に留まった。今日の中国では、フィールドワーク・社会学、歴史学などの研究の成果に比べ、民族理論の発展が遅れているといえよう。教条化、公式化した理論は民族研究の妨げとなるため、さらに合理的で、科学的に民族理論を発展させていくために、民族識別に対する再反省と再検討が重要であろう。

【参考文献】

- 費孝通 1980年「關於我国民族的識別問題」『中国社会科学』10号 北京
1988年「中華民族的多元一体格局」『北京大学学報』4号 北京
2000年「簡述我的民族研究經歷和思考」『中央民族大学学報』1号 北京
李紹明 1998年「我国民族識別的回顧与前瞻」『思想戰線』1号 昆明
熊坤新 1998年「斯大林民族定義之我見」『世界民族』2号 北京
黄光学他編 1995『中国的民族識別』民族出版社 北京
広西チヤン族自治区編輯組 1987『広西社会歴史調査(7)』広西民族出版社 南寧
馬戎 2000年「關於民族定義」『雲南民族学院学報』1号 昆明
毛里和子 1998年「周縁からの中国」東京大学出版会 東京

新刊紹介

鈴木正崇著 『女人禁制』

歴史学や民俗学の学問的成果を一般向けに解説した歴史文化ライブラリーシリーズのNo.138に当たる本書では、女人禁制が生成され変容し維持されてきた経緯が実に詳しく明らかにされる一方、女人禁制の成立理由となる女性特有の経血や出産に伴う出血を血の穢れとする観念について新たに問い直しがなされ、穢れと不浄についての新しい理論提唱が試みられている。全体の構成は、第一章 女人禁制への視覚、第二章 大峯山の現状、第三章 山と女性、第四章 女人

禁制、第五章 仏教と女性、第六章 穢れ再考、となっている。筆者は自らも説いているように、歴史をしっかりと捉えつつ、現在の動態をも視野に入れた複眼的な方法で理論を展開している。不浄の動態について図式化が試みられており(220頁)、女人禁制を存続させてきた日本人の穢れの観念がとて理解しやすく示されている。
(広田律子)

吉川弘文館 2002年3月 定価1,700円